

はじめに

「こういう症例はどうやって計測すればよいのだろう？」

本増刊号はその疑問に答えることをコンセプトにしました。

心・血管エコーは他領域のエコーに比べて計測項目がはるかに多く存在します。その理由は、心臓がポンプ機能をもつ臓器であり、形態の詳細な計測に加え、収縮機能や拡張機能などの心機能評価、弁逆流や狭窄などの血流評価が加わるからです。

現在、心・血管エコー計測は米国心エコー図学会や日本超音波医学会が提唱するガイドラインに基づいて行っている施設が多いと考えられます。しかし、これらのガイドラインには典型例の計測部位と計測方法が示されているだけで、日常検査で大部分を占める非典型例では、どこをどうやって計ればよいかが具体的に書かれてはいません。

このような非典型例に対して各施設で計測ルールを決めていればよいのですが、不安に思いながらもただなんとなく計測している技師・医師もきっと大勢いることでしょう。日常検査で経験する非典型例の具体的な計測法を知りたいというのが、心・血管エコーを行っている初心者が最も困っている点ではないでしょうか。

そこで、本増刊号では心・血管エコー計測のバリエーションを数多く取り上げ、ガイドラインでは補いきれない計測のノウハウをエキスパートの先生方から解説していただきました。すぐにでも実践に役立つと思います。ただし、各施設で取り決めた計測ルールであったり、各先生方の経験に基づいた計測法であったりしますので、絶対にこのように計測すべきということではありません。その点は誤解のなきようお願いします。

正しい断面が描出できるようになったら、次は正しい計測法をマスターしなければなりません。本増刊号を糧にして、「こういう症例はこうやって計測すればよいのだ」という自信を身につけていただければ大変うれしいです。

たねむら ただし
種村 正

公益財団法人 心臓血管研究所附属病院臨床検査室